

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 36

広渡廃寺軒平瓦の新羅系「包み込み技法」

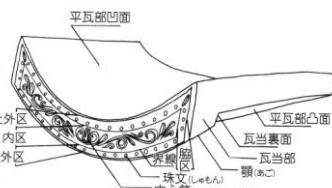
一 播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦 [補注編] 一
寺 岡 洋

前々号「播磨の新羅系及び傍流の軒丸瓦」では、播磨で出土した新羅系や朝鮮系と推測される傍流の軒丸瓦等を取上げた。その際、その特徴である“単弁六弁”とか、“周溝（二重圈線）”等毎に集成しており、同じ廃寺跡から出土しているにもかかわらずバラバラに取上げざるを得なかった。そのため、取上げた軒丸瓦を使用した寺院そのものの性格が分かりにくくなっている。それと、軒丸瓦の文様（デザイン）よりさらに特徴が鮮明に表れる特異な技法により作られた軒平（のきひら）瓦や平瓦・丸瓦などについて触れていくなく、[補注編] と銘打って書き足したい。

広渡（こうど）廃寺

「単弁（たんべん）六弁」で2種、「複弁（ふくべん）八弁」で1種、計3種を紹介した。

森郁夫氏 [1990] や金誠龜氏 [1995] がはやすく取上げられた軒丸瓦であり、さらに双塔伽藍 [寺岡2010]、平瓦のジグザグ縛叩き「寺岡2013a」でも取上げており、渡来系の影響が濃厚である。今回、新羅系の包み込み技法を紹介する。



□軒平瓦の新羅系「包み込み技法」

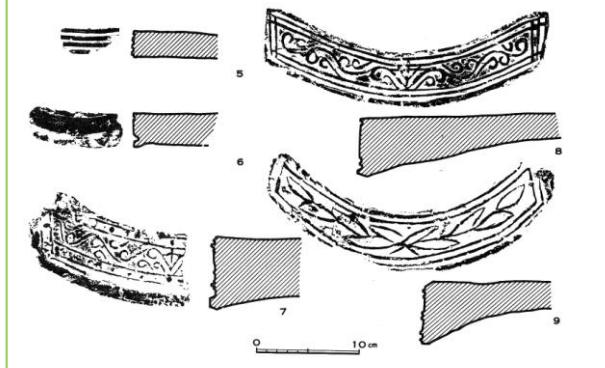
軒平瓦（上図）は軒丸瓦とセットで屋根の軒先を飾る。軒平瓦の作り方は、「模骨（もこつ）」とか「桶」と呼ばれる型に、瓦当（がとう）面が厚手になるように切り取った粘土板を巻いて作った「円筒形の粘土の上から（文様が彫られている）範型を押し込んで、たたき込んで、それを4枚に分割して作るというのが大多数」[奈文研2009]である。

新羅が起源とされる「包み込み技法」は、木製の「範に粘土を詰めて文様範を作ったところへ平瓦を立ておいて、凹面側・凸面側・側面側に粘土を付加していく方法」で、「つまり、軒丸瓦の作り方と全く一緒」である。軒丸瓦の場合は「包み込み」と言わずに「接合式」と呼ばれる。

「包み込み技法」という用語は、本来、平安時代後期の播磨産軒平瓦の製法をさすもので、播磨とは因縁がある。院政（いんせい）期、受領（すりょう）国司により播磨産の瓦が京都へ大量に運ばれた。

広渡廃寺の軒平瓦

広渡廃寺では軒平瓦が4種類（I～IV）、222点



出土した。それ以外に平瓦の先端に粘土を足し広端を広げた無文の軒平瓦もある [小野市2005] (図の6)。

軒平瓦 I (図の5) の文様は重弧文（弧線が重なる）で152点と最も多く出土し、うち127点が瓦溜から出土した。再建時に廃棄されたものであろう。四重の重弧文は主流の文様とされる。創建時に使われた重弧文軒平瓦は通常の作り方であった。

軒平瓦 II・III・IV (図の7・8・9) が「包み込み技法」で作られていた。出土点数は81点。II・IIIの文様は雰囲気の異なる唐草文（からくさんもん）、IVは文様が崩れ木の葉状になっている。軒平瓦 II～IVの作り方（瓦当と平瓦の接合部）を報告書によりみてみる。

・軒平瓦 II 「平瓦の先端を瓦当面に突き刺し、上側と下側に粘土を足して作られている」。出土数4点。



64. 軒平瓦 III (金堂西基壇)

・軒平瓦 III (右図3点)
「平瓦を瓦当部に突き刺して作られ、…上側の粘土の足しは少ないものの、下部は分厚く足しており……」。
出土数40点、金堂と講堂で27点出土。



69. 軒平瓦 III (講堂)

・軒平瓦 IV 「瓦当部は、平瓦の先端を包み込むように作られ……」。出土点数は25点。金堂基壇の拡張部の瓦積みには、この瓦の破片が使われている。



70. 軒平瓦 III (講堂)

軒丸瓦・軒平瓦（軒瓦）の年代

報告書では、軒丸瓦 I (新羅系単弁六弁) と軒平瓦 I (重弧文) を創建瓦とし、7世紀後半～奈良時代前期。順次、軒丸瓦 II (新羅系単弁六弁) と軒平瓦 II を奈良時代前期～中期。軒丸瓦 III と軒平瓦 III が奈良時代後期。軒丸瓦 IV (新羅系瓦で取上げた二重圈線・周溝をもつ) と軒平瓦 IV を奈良時代後期とする。

だからみると広渡廃寺は創建時には新羅系デザインの単弁六弁軒丸瓦と主流の重弧文軒平瓦を採用し、伽藍の整備期には新羅系技法で作られた軒平瓦を採用している。創建から廃絶まで一貫して新羅系文様・技法と関係あったことになる。

□新羅系包み込み技法の類例

この傍流の技法で作られた軒平瓦の類例は少なく、

摂津・細工谷遺跡（百濟尼寺）、大和・山村廃寺、額安寺、紀伊・上野廃寺、和泉・信太寺、伯耆・斎尾（さいのお）廃寺、平城京・元興寺（がんごうじ）などと、関東地方の下総（しもうさ）国分寺（軒丸・軒平瓦は新羅系文様の宝相華（ほうそうけ）文で知られる）、常陸・台渡里（だいわたり）廃寺、福島県郡山周辺などでみられ、東日本では8世紀代に展開する〔上原1995〕。

以下、播磨と関連する類例をみる。



□摂津・細工谷遺跡（百濟尼寺）（上図 ↑）

細工谷遺跡（百濟尼寺）は、前号の法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦（法隆寺216B）でも紹介した。報告書〔大文協1999〕の軒平瓦ⅡA2で、包み込み技法で作られている。「包み込み式の瓦当……。平瓦の端面にはキザミを入れて接合を助けているが、出土した軒瓦はすべてここで剥離している」と記される。

播磨との関連を裏付ける資料として、郡名は分からぬが、米を運んだ荷札木簡が出土している（「播磨國口郡口口」「里秦人口田万口口一石」）。（鴟尾↓）

播磨ブランドの蓮華文帶鴟尾（しひ）も出土した。この特徴ある鴟尾は、漢部（あやべ）・漢人（あやひと）が経営した播磨峰相山（みねあいさん）窯跡群の瓦窯で焼かれたものである。「四天王寺Eの范型bと同范の可能性が高い」と報告されており、四天王寺ともネットワークが存在した。

百濟王氏はいうまでもなく百濟王族であるが、渡来系集団・氏族の象徴的な存在でもあったようである。難波・百濟郡から北河内の交野郡に本拠を移し、建立した百濟寺（特別史跡 枚方市）は復古的な新羅様式の双塔伽藍を備えている（大官大寺・東大寺・西大寺・秋篠寺なども双塔伽藍であるが唐の様式になる）。



□大和・山村廃寺

奈良の門跡寺院として知られる圓照寺の裏山に、渡来系寺院に多い瓦積基壇が残る。現存する法隆寺西院伽藍の金堂・塔創建瓦と同文（文様構成が同じ）の忍冬文軒平瓦が包み込み技法で作られる。（上図）

前号で紹介したように、百濟人と関連すると指摘される忍冬文軒平瓦（216A）は、播磨の新部大寺廃寺・繁昌廃寺・吸谷廃寺（賀毛郡）・下太田廃寺（飫磨郡）等で採用されるが包み込み技法ではない。

山村廃寺の軒平瓦の年代は、670年代後半以降の

天武朝（672～686）、播磨の類例は「持統朝・文武朝の年代のもので、ほぼ藤原宮（694～710）の時期と併行する年代」とされる〔山崎2008〕。

播磨関連では、ナラの山村から播磨への移住が『播磨國風土記』に記される。飫磨郡巨智里（ごちのさと）の里名の由来について、「巨智等、始めて此の村に屋居（いへい）しき。故、因りて名となす」、「韓人（からひと）山村等が上祖、柞（なら）の巨智の賀那、此の地を請ひて田を憩りし時、…」とある。韓人山村等の「山村」はナラでの居住地による名称と考えられ、山村廃寺は山村巨智氏が造寺を主導したのであろう。

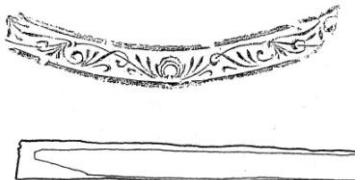
□紀伊・上野廃寺（国史跡）

紀ノ川河口に近い北岸、和泉山脈南麓裾に立地する（名草郡／和歌山市）。双塔伽藍、瓦積・塼積（せんづみ）基壇、新羅系軒丸瓦などで知られ、『むくげ通信』254号で紹介している。

山崎氏によれば、「7世紀末の軒平瓦で紀伊上野廃寺、伯耆斎尾廃寺などの獨特の忍冬文を用いた軒平瓦がある。この軒平瓦は包み込み式の新羅式の作り方であり、主として7世紀に新羅から日本に渡來した人々の寺で主として用いられた」〔山崎2008〕。

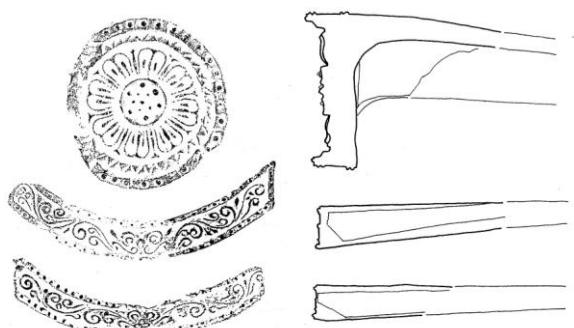
軒丸瓦は、花弁の子葉が凹弁ふうのもの（A 上野廃寺系とも）と、「外縁に珠文」がめぐる新羅系のもの（B）とがある〔和歌山県1986〕。

軒平瓦は、6種の範（aI～aIV、bI・bII）があり、すべて包み込み技法である。aIタイプは、「法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦とは別」のグループの、系譜の異なる忍冬唐草文で、突然現れ、すぐ消えていく」と指摘される。（上図 aI ↑）



Bグループの軒平瓦（下図）の文様については、「獸面と唐草を組み合わせた文様は、新羅系の文様であり、…帝釋寺（益山）例との文様の酷似性は注目に値する」。また、軒平瓦の上下外区（がいく）の珠文も軒丸瓦同様、統一新羅的要素と考えられている〔小谷2001〕。

（下図 軒丸瓦Bと軒平瓦bI・bII）



軒丸瓦Bと同范軒丸瓦が片岡王寺（奈良県王寺町）で採集されており、帝塚山大学・附属博物館で展示されている。

上野廃寺と三間名干岐（みまなのかんぎ）

『日本靈異記（りょういき）』下巻第三十には、「老僧觀規は、俗姓、三間名の干岐なり。紀伊国名草郡の人なりき。……先祖（おや）の造れる寺、名草郡の能應（のお）の村に有り。名を弥勒寺と曰ふ。字（あざな）を能應寺と曰ふ」とある。この弥勒寺（能應寺）は能應村という所在地から山村廃寺に比定されている。

干岐（旱岐）は古代朝鮮諸国の王・首長の尊称であり、三間名と名乗る氏を『新撰姓氏録（しょうじろく）』で探すと三間名公（きみ）がいる（公は姓（かばね））。

『新撰姓氏録抄（未定雑姓、右京）』には、「弥麻奈國主（みまなこにきし）、牟留知王の後なり。……意富加羅国（おほからくに）の王（こきし）の子、名は都努我阿羅斯等（つぬがあらしと）。亦は阿利叱智干岐（ありしちかんぎ）といふ」と記される。

この系譜によれば、三間名干岐（旱岐）は意富加羅国（大加耶）の王族で、都努我阿羅斯等とも呼ばれていた。大加耶（高靈が王都）は真興王23年・欽明17年（562）、新羅に併合されている。

紀ノ川北岸、上野廃寺の西方に立地する大谷古墳（和歌山市）からは馬冑（馬の冑）とともに大加耶系の威信財である金銅冠が出土しており、大加耶と交流があったことを裏付ける。

播磨関連では前号でも取上げているが、紀ノ川河口の名草郡大田村から揖保郡大田村へ「韓国（からくに）より度（わた）り來た吳勝（くれのすぐり）」が移住している。吳勝が造寺を主導したと考えられている下太田廃寺（姫路市）は、軒丸瓦・軒平瓦（216A）とも法隆寺式の軒瓦である。

□斎尾（さいのお）廃寺 (国指定特別史跡)

上野廃寺と共に山崎氏が取上げられた寺院である。大山（だいせん）の北東、倉吉市の西方、日本海まで約2.5km、加勢蛇（かせいち）川下流右岸の丘陵上に位置する。推定古代山陰道が北面を通過する（東伯郡琴浦町）。『むくげ通信』253で紹介している。

軒丸瓦5種（I～V類）、軒平瓦4種（I～IV類）が確認され、軒平瓦I類が包み込み技法（上図）。

ここで新羅式技法についての山崎氏の説明を引用する。「文様のある木製範を水平に置き、瓦当部に粘土をつめ込み、平瓦粘土を垂直に立てて接合し、接合粘土を瓦当と平瓦に巻きつけるように作り上げる特徴をもつ（即ち新羅式である）」。

新羅との関係について山崎氏は、都努我阿羅斯等の伝承から日本海（北海 きたつうみ）ルートを想定されている。『日本書紀』垂仁紀二年条「一云（あるにいはく）には、都努我阿羅斯等の渡来のコースとして、穴門（あと 長門）→ 出雲国 → 越国筈飯（けひ）浦（敦賀湾）

が描かれている。敦賀には式内大社・氣比（けひ）神社が鎮座する。朝鮮半島往来に際し日本海ルートは弥生時代以来、瀬戸内海ルートと並ぶメインルートである。

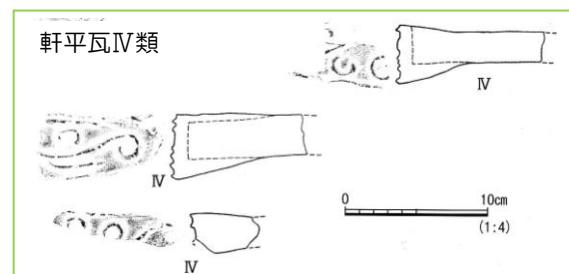
播磨との関連では、播磨産高級ブランド蓮華文帯鷦尾が出土している（右図 琴浦町歴史民俗資料館で展示）。馬で美作道→因幡道→山陰道を運んだのか、工人が出かけたのか、いずれにせよ渡来系ネットワークの存在が想定できる。



□吸谷（すいだに）廃寺

吸谷廃寺は前号の法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦（216A）と、額部施文軒平瓦を取上げた際に新羅系包み込み技法も紹介している〔寺岡2013C〕。

出土瓦は川原寺式軒丸瓦と法隆寺式軒平瓦が共存する（大雜把に、川原寺を官営寺院とすれば法隆寺は民営寺院で、提携相手先の性格が異なる）。



軒丸瓦2種、軒平瓦5種が知られる〔菱田2010〕。軒平瓦IV類に包み込み技法がみられる。「間延びした唐草が配されるもので、おそらく広渡廃寺（小野市）の類例のように中心飾りに縦棒を置いて左右に唐草が展開する形状になると想われる。瓦当部を包み込み技法で製作していることが観察できる」。

年代については、「軒丸瓦II類と軒平瓦IV類は補修あるいは再建時の瓦で9世紀後半ないし10世紀前半に位置づけられる」。年代については動くかもしれないが、この時期ならば新羅は乱れており「年表」を見ても新羅人漂来や新羅人海賊など、新羅に関する記事が散見する（新羅滅亡・高麗建国：918年）。あるいは今來（いまきの）新羅人が播磨にいたのかもと想像される。年代が古くなれば広渡廃寺例につながる。

□包み込み技法と忍冬唐草文軒平瓦の関係

新羅系包み込み技法が見られる軒平瓦と法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦の関係をみると（取上げてない寺院もあるが）、

- a 法隆寺式 山村廃寺・額安寺・細工谷遺跡
- b 別系統 上野廃寺・斎尾廃寺
- c 無関係 広渡廃寺・吸谷廃寺・和泉信太寺・奈良元興寺・伝吉田寺（備後）

以上のようになる。

*引用・参考文献はむくげの会HPを参照して下さい

引用・参考文献

- 森 郁夫 1990 「瓦当文様に見る古新羅の要素」
『畿内と東国の瓦』京都国立博物館
- 森 郁夫 2003 「古代寺院研究上の問題点」
『学叢』25号 京都国立博物館
- 金 誠 龜・(訳) 武末純一 1995
「古代日本の新羅系軒丸瓦について」
『青丘学術論集』第6集 韓国文化研究振興財団
- 金 誠 龜 2000 「新羅瓦の成立とその変遷」
『新羅瓦博』国立慶州博物館 *ハングル
- 小野市教育委員会・広渡寺廃寺跡発掘調査団 1980
『播磨広渡寺廃寺跡』
- 小野市教育委員会 2005 『国史跡 広渡廃寺跡』
- 寺岡 洋 2010 「播磨の双塔伽藍からみる「知識」のネットワーク」『むくげ通信』243 むくげの会
- 寺岡 洋 2012a 「伯耆・因幡の古代寺院を訪ねて」
『むくげ通信』253 むくげの会
- 寺岡 洋 2012b 「紀ノ川流域の古代寺院を訪ねて」
『むくげ通信』254 むくげの会
- 寺岡 洋 2013a 「加古川流域と河内一ジグザク縄叩きは語るー」『むくげ通信』257 むくげの会
- 寺岡 洋 2013b 「加古川流域と山背・但馬一「山田寺亞式」軒丸瓦は語るー」『むくげ通信』258 むくげの会
- 寺岡 洋 2013c 「加古川流域の「山田寺亞式」軒丸瓦と顎部施文軒平瓦」『むくげ通信』259 むくげの会
- 寺岡 洋 2014 「瓦積基壇をもつ古代寺院—播磨編ー」
『むくげ通信』262 むくげの会
- 井内 功・井内 潔 1990 『東播磨古代瓦聚成』
井内古文化研究室
- 上原真人 1995 「畿内からみた豊前の古瓦—顎面施文軒平瓦に関する予察ー」『古文化談叢』 第34集
- 森 郁夫 2014 『一瓦一説』淡交社 p.211
- 山崎信二 2008 「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本との関係」『日韓文化財論集 I』
奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所
- 奈良文化財研究所 2009 『古代瓦研究 IV』 p152
- 大阪市文化財協会 1999 『細工谷遺跡発掘調査報告 I』
- 森 郁夫 1982 「上野廃寺の発掘調査」
『佛教藝術』142号 每日新聞社
- 和歌山県教育委員会 1986 『上野廃寺跡発掘調査報告書』
- 紀伊風土記の丘管理事務所 1993
『特別展 紀伊の古代寺院 出土瓦を中心として』
- 小谷徳彦 2001 「紀伊と大和の同範瓦—新素材を中心にしてー」『紀伊考古学研究』4
- 佐伯有清 1983 『新撰姓氏録の研究 考証篇 第六』
吉川弘文館
- 朴天秀 2007 『加耶と倭』講談社選書メチ工
- 義則敏彦 2007 『西播磨の古代寺院と蓮華文蒂鷲尾』
たつの市立埋蔵文化財センター
- 鳥取県立博物館 2003 「斎尾廃寺」
『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』
- 加西市教育委員会 1992 『吸谷廃寺』
- 加西市教育委員会 1992
「吸谷廃寺(第2次)現地説明会資料」
- 菱田哲郎 2010 「吸谷廃寺」
『加西市史』第七巻 史料編I 考古 加西市